

梨産地の継承に向けて
いすみ市の先進事例を学ぶ

市原市では、梨生産者の高齢化や離農により、担い手の確保・育成が求められています。そこで、新規就農者の受入体制の強化に向けた視察研修会を開催しました。

視察研修会では、いすみ市を訪問し、研修受入農家となつてゐる生産者2名と夷隅農業事務所職員から話を伺つた後、意見交換を行いました。研修を受け入れている生産者からは、研修生の受入れに至つた経緯や実際に取り組んだ感想等について説明いただきました。また、農業事務所職員からは関係機関の支援体制、研修機関連定のための手続き等の説明を受けました。

意見交換においては「研修生の住まいはどのようにしているか」、「地代はいくらで貸出しているか」、「研修前のお試し期間を

設けているか」等の質問や意見交換が活発に行われ、研修の受入れについて生産者が検討する機会となりました。また、関係機関からは「手続きの進め方等について伺うことができ、今後体制構築を考える上で参考になった」という意見も挙がりました。

高齢化による農業者の減少や、耕作放棄地の拡大により、農地が適切に利用されなくなる恐れがあります。そこで、農地の集約を加速化させるため、令和5年4月に農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律が施行されました。これにより、人・農地プランが法定化され、「地域計画」へ名称が変わりました。

人・農地プランから
「地域計画」へ

その後は達成に向け、農地の受け手を確保しつつ、農地の集約を進めていきます。

▼目標地図の作成

将来、地域の農地を誰が利用し、農地をどう集約するか、話し合いの結果や、アンケート等を基に10年後の農地の貸し手や借り手の意向を反映した地図（目標地図）を作成しましょう。

農業事務所では今後も市原の梨産地の維持に向け、関係機関と連携して新規就農者の受入体制整備を進めていきます。

情報交換の様子



新規就農者が学びあふ場に
農業経営体育成セミナーを開講しました

～農業経営体育成セミナーを開講しました～



開講式では、出席した関係機関から
激励の言葉が贈られた



自身の課題解決に向けたプロジェクトの
実施計画を検討する専門生

▼開講式

今年度の開講式は、3年ぶりに関係機関が出席し、新型コロナウイルス感染症の発生前と同じ風景が戻ってきました。

開講式では、千葉県指導農業士協会千葉地区会の横田会長から、就農して間もないセミナー生に対し、営農の心得や励ましの言葉が贈られました。

▼第1回研修

基本生（1年目の受講生）は、初めての顔合わせとなり、自己紹介を行った後、千葉地域の農業について講義を受けました。

専門生（2年目の受講生）は、近況報告を行い、同じ時期に就農した者同士で営農上の悩みや最近の農作業の様子を話し、助言しあう姿がみられました。また、自身の経営における課題解決に取り組むプロジェクトについて、進捗状況を発表し、調査方法等の検討を行いました。

総合生（3年目の受講生）は、経営発展に向けて営農計画を作成することになっています。計画作成の流れについて説明を受け、各自取り組んでいきます。

今年度は農研機構の視察やパイプハウスの建て方の研修をカリキュラムに加え、幅広い内容の研修を実施し、新規就農者を支援しています。

千葉農業事務所

普及だより

URL <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-chiba/>

【第157号】 2023年11月1日

発行：千葉農業事務所改良普及課
千葉地域農林業振興普及協議会
千葉市緑区大金沢町473-2
(千葉農業事務所 分庁舎)

TEL043(300)0950

FAX043(293)2710

農業と消費者の橋渡しを 八千代市 高橋克弘さん

八千代市吉橋の高橋克弘さんは、露地2.5ha、施設10aで春夏二シーズンやネギ、西洋野菜を栽培しています。平成25年に千葉県指導農業士に認証され、今年度は八千代市園芸協会会長に就任するなど、地域農業の発展に尽力されています。

▼常に新しい品目に挑戦

市内のレストランから要望を受け、平成15年頃から市場にあまり出回らない西洋野菜等の生産を手がけるようになりました。徐々に品目が増え、今では市内外のレストラン3店舗に100種類以上の野菜を提供するほか、直売所でも販売しています。常にアンテナを張り、供給先のレストランや種苗会社から情報収集して新しい品目や品種の試作を積極的に行っています。

▼地域とのつながりを大切に

10年以上前から地域の幼稚園児やその保護者へ農業体験の場の提供を続けているほか、八千代市農業ボランティアを毎年10人ほど受け入れており、地域住民との交流を図っています。また、令和3年からは千葉県立農業大学校から実習生を受け入れ、農業の担い手育成にも貢献しています。

▼今後について

八千代市で様々な野菜が作られていることをもっと知ってもらうため、活動していきたいと話されます。まずは多くの人が集まるショッピングセンターで、八千代市園芸協会による販売会を計画中です。



様々な野菜が並ぶほ場を案内してくれた高橋さん

若手水稲農家、活躍中 市原市 関本匡さん

関本匡さん(33歳)は、市原市の大規模水稲農家です。6年ほど前までは勤めながら営農していましたが、経営規模が拡大する中で専業として農業に携わる決心をし、今では水稲の栽培面積が38haとなつています。

▼機械化による省力的な農業

「就農の決め手は機械が好きだったこと。」と語る関本さんは、機械への投資を積極的に行っています。作業は主として父と二人で行うため、人を雇わない分、機械に投資することで作業を省力化し、規模の拡大を実現しています。

▼安定経営に向けて

年間を通じて収入を得られるように、秋冬はキャベツやブロッコリーを1ha作付けるなど野菜栽培にも取り組んでいます。

水稲についても、飼料用米による安定的な収益確保や、肥料の高騰対策としての鶏ふんの利用など、安定経営に向けた努力を重ねています。

▼攻めの農業経営

水稲は収量を求めすぎると倒伏のリスクが高まりますが、「10a当たり平均9俵」と高い収量目標を掲げています。また、地元飲食店などの新たな販路拡大にも力を入れ、利益の出る、「攻めの農業経営」を目指しています。

これからも地域の中核的な経営体として、益々の活躍が期待されます。



新しく導入した乾燥機の前に立つ関本さん

野菜作りにおける 緑肥を活用した土づくり

畑の地力を維持し、高品質・高収量な農作物生産には、緑肥や堆肥等の有機物の供給が大切になります。今回は緑肥の効果と選び方について紹介します。

▼緑肥の効果

1 化学性の改善

有機物(緑肥)が分解されて形成された腐植は肥料成分を吸着するため、肥料の流亡が減ります。マメ科の緑肥は、根粒菌により窒素を根に固定します。

2 物理性の改善

緑肥をすき込むと、作土に有機物が供給され、土壌の団粒化が促進されます。結果として、作土が軟らかく、また保水性や通気性などが改善されます。品種によっては、根が深さ約1mまで伸び、機械による耕うんでは届かない土層の排水改善も期待できます。

3 生物性の改善

緑肥の導入は、土壌病害の軽減につながるほか、アブラナ科の緑肥ではすき込むことで抗菌成分が発生するものもあります。また、センチュウの抑制効果がある緑肥もあります。

▼緑肥の選び方

緑肥の導入にあたっては、改善の目的を明確にすることが大切です。例えば、水はけの改善には根を深くはる「ソルガム」、センチュウ抑制には「エンバク」や「マリーゴールド」等があげられます。また、緑肥は種類によって、栽培適期や腐熟期間が異なりますので、注意しましょう。その他、緑肥は景観美化やドリフトガードクロープとしての利用、防風や土壌流亡対策としての効果も期待されます。



ソルガム(農研機構より引用)

WCS用稲の生産状況と 栽培のポイント

▼稲WCSとは

稲WCSは、稲の地上部(籾・茎葉)をまるごと刈り取りロール状に成型したものをフィルムでラッピングし、乳酸発酵させた飼料です。

稲作農家は、収穫作業を外部委託することで、収穫以降の作業を省力化できます。また、畜産農家は、輸入乾牧草に比べて安価に飼料を手に入れるというメリットがあります。

WCS用稲は令和5年度に千葉県で約5ha、市原市で約20ha、八千代市で約14haが作付けされています。

▼栽培のポイント

1 施肥

通常の水稻栽培では、収穫後に稲わらをほ場にすき込み、それが翌年の養分となりますが、WCS用稲は茎葉を含む地上部すべてを

2 病害虫・雑草防除

WCS用稲に使用可能な薬剤は限られるため、(一社)日本草地畜産種子協会の「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」に記載されたものを使用しましょう。

3 収穫に向けた水管理

収穫作業の効率化のために早期に落水し、田面を固めておく必要があります。また、土や泥の混入による飼料品質の低下を防ぐために、中干し等の水管理が重要となります。



WCS用稲の収穫作業